Tokai Fubokon Letter

東海中高父母懇談会発行
教員代表：北村雅臣
父母代表：和田啓子
2022／ 4／28（木）
No.25

地域合同世話人会&幹事会

4/9(土)に講堂にて各地域の代表約130名にご参加いただきました。この行事は、各地域での地域懇談会運営にあたっていただく地域幹事・世話人を対象に、地域懇談会の意義を説明し、東海の教育について理解を深めてもらう目的で行われています。

【参加者の感想】

- 受験のことや東海のことを聞くことができて参加して良かったです。こんなに良いお話、もっとたくさんの保護者の方が聞きたいはず、と思いました。
- 初めて参加致しました。先生方の講演も大変参考になりましたし、父母懇の歴史など知らないことばかりでした。このような会を続けてきて下さった諸先輩方に感謝申し上げます。
- 「親も助けを求める姿を見せていい」の言葉が響きました。子どもに口で言うのでは伝わらないと悩んでいました。結局、自分も親に言われたことよりも、後ろ姿から感じていたのだ、と気づかせて頂きました。少し元気が出ました。
- 資料プリントが充実していたため、会の進行や講演の内容が分かりやすく、スピーディーで明快な幹事会世話人会だったと思います。寺田先生の講演で、父母懇の歴史や重要性にまつわるお話もとても有意義でした。子供の成長のためには親の成長も必要だと改めて知り、大変励みになりました。
- 今年の幹事学年の進行の仕方や心構えなど、わかりやすく教えて頂いて安心できました。折井先生の入試結果は、現状に一喜一憂せず、目標を持って学習を続けることが大事と感じました。軽快な話しぶりに引き込まれて聞いていました。寺田先生のお話は、父母懇の歴史を詳しく教えてくださり、父母懇は少し面倒だなと思っていた自分の考えを改めることができました。父母懇が学校運営に与えた影響が大きかったこと（中高一貫化など）にびっくりしました。
- コロナの影響で親同士の会話もなかなかできず、学年で話せる人がいませんでした。幹事をすることによって学年の絆を深められたらと思います。

ここからは、当日行われた折井先生の大学入試報告と、寺田先生の講演の概要をお届けいたします。

折井貴大先生（高校英語科）～2022年大学入試を東海目線でふり返る～

折井先生は今春の卒業生を3年間持ち上がって、受験期の生徒たちを間近で支えていらっしゃいました。今春の東海生の奮闘の様子、新カリキュラムへの対応、「本物」の学びと接続する東海の教養教育の信頼性について語っていただきました。

【出口から入口へ】

今年、11年目にして初めて中1の授業をやっている。「またぎ」という。すごく新鮮な経験。

【今春の大学入試の特徴と出願に際して】

2022年度入試は、共通テストが非常に難しくなった。顕著な難化。平均点は過去に例がないくらい低い。去年と比べると50点下がった。それゆえ今年は共通テストの点数を見て出願先を悩む子が全国的に多かった。でも東海生はさすがの実績を残してくれた。

【変化に強い東海生】

概して「東海生は変化に強い」と言える。点数を見て安易に出願先を変えない方が良い。受けたい大学を受けた方が良いというのが鉄則。

息子さんの点数が悪かったとしても、お父さんお母さんは動揺を見せてはダメ。息子さんに伝わるから。

本番でどんな点数を取って来ても、泰然と構えて「大丈夫、大丈夫」と。コロナなどいろいろあったが、「平常心を保って目の前のことをひとつひとつやって行けばちゃんと結果が出る」というのがまとめ。

【新カリキュラムへの対応:「情報」「社会」「数学」】

今後の入試に向けての話。現高Ⅰから新カリキュラムに移行する。共通テストに「情報」が入る予定。

いちばん大きく変わるのは「社会」。高Ⅰで地理が入って、社会を3つ履修する。「数学」は文系でも少し大変になる。数ⅠA・ⅡB に加えて、文系でも「数学C」が必要になり、「数学ⅡBC」になる。難関国公立大を目指す場合には、今までよりも「数学」を頑張らなくてはいけなくなる。

そして「情報」。現在は5教科7科目だが、「情報」が追加されて6教科8科目に。ただ、この場で言っておきたいのは、「東海のカリキュラムは入試の変化にも絶対大丈夫!」ということ。特に「情報」について、東海には「情報」の専門教員がいるので「情報」が入ってもちゃんと対応できる。安心してほしい。われわれ教員もプロ意識を持ってやっている。信じてください。

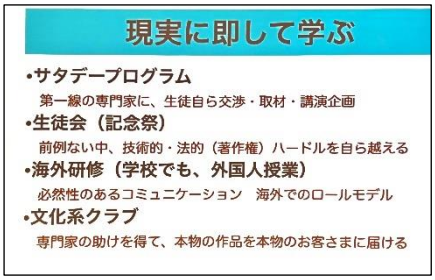
【入試と教育は別物】

昨年度は、この場で堀口陽平(高校英語科)先生が総括を行った(T.F.Letter No.8 参照)。ひと言で言えば、「入試と教育は別物」。

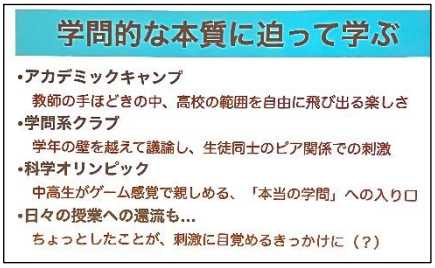
「あるべき姿」について考える時、「われわれが本当に育てたいのは、『試験に受かる人』なのか『能力を磨いた人』なのか?」という問いが生まれる。当然、能力を磨いた人。試験は所詮人為的な「作り物」。虚構性がある。

【「本物の学び」に向かう仕掛け】

虚構性の対極はauthenticity。「本物であること」という意味。「本物の学び」が大事。授業やテストは作り物で、本物にはなれない。作り物とはちがう本物を勉強しないといけないのが、教育の課題。



東海には本物を学ぶ仕掛けがたくさんある。



「学問的な本質に迫って学ぶ」こともやっている。勉強と学問はちょっとちがう。アカデミックキャンプでは、哲学、歴史、化学など、学校の試験とは関係なく勉強するイベントがある。学問系のクラブもある。言語学オリンピック、生物オリンピック、数学オリンピックに出て賞を取る生徒もいる。

これらは授業やテストとは一線を画して、虚構のなかに本物を持ち込もうという試み。以前に生徒会顧問団長として記念祭を担当した。生徒は、広告取りのために何十万のお金を動かす。自分たちで企業に電話をかけて広告協賛の依頼をする。この学校で大事にしたいのは、「本物に触れる」ということ。入試は入試でしっかりやるが、教育は教育できちんとやる、これが東海の良いところ。そこを大事にしていきたい。

【合格者が振り返る親の関わり方】

今日のまとめ。東大現役合格者のうち、「親から勉強をしなさい」と言われたのはわずか16.7%。約9割が、「両親はよく話を聞いてくれた」と答えている。親は、「勉強しなさい」と言うのではなく、「子どもの話を聞いてくれる」存在。「欲しい本は買ってくれましたか?」という質問に対しては、ほとんどがYES。

最後に、ある生徒のことばを紹介したい。「家族は僕の方針を理解してくれ、自由に勉強ができた。友人とは互いに鼓舞し支え合い、やる気と学力を高めあった」。自由にできるのがよい。クラスメイトは敵じゃなくて仲間。東海は一緒に勉強して高め合う。「自分の知的好奇心を大切にして興味があることにトライして欲しい。難しそうなことでも、始めてみると意外と中高生でもできたりする」。入試は入試、それとは別に興味のあることをやっていくのが東海の教育の魅力。

寺田幸弘先生
創立40周年 東海中高父母懇とは
～東海の教育づくりに果たした役割～

寺田先生は先月末に退職されましたが、44年間東海で教鞭をとられてきました。東海父母懇創立からの長い歴史を振り返り、学校づくりに父母懇がどのような足跡を残してきたのか、深い意義をレジュメとともに丁寧に説明していただきました。最後にそれを踏まえて父母の方へのメッセージを語ってくださいました。

【東海父母懇とは】

今日は東海中高の父母懇が、東海の教員や、進路、それから生徒たちの活発な自主活動などとどのような関わりを持ってきたのかということをお話ししたい。父母懇がなければ、東海の教育づくりはたぶんこのような形で進んでこなかったと思う。

まず、東海父母懇には創立以来掲げている3つのスローガンがある。「ひとりぼっちの父母を作らない」「子どもたちの人間らしい成長、発達を支える」「私学助成をはじめ、私学教育の発展のために努力し合う」。おかげさまで、ひとりぼっちの父母の方はいなくなりました、たぶん。ネットワークがすごく発達して、一人で悩んだり、抱え込んで迷路に入ってしまったり、という方は、随分少なくなったのではないかと思う。

【東海父母懇の特徴①】

東海父母懇の一つの特徴は、父母の要求に基づいた活動しているということ。年表に沿って3つの点に関してお話ししたい。

まず僕が東海に入ったのは1978年、昭和53年。実はその2年前の1976年に定年制が初めてできた。定年制が導入されていなかったら、僕と皆さんのご縁はなかった。東海は65歳定年だが、定年を迎えるという当たり前のことが、やっと実現したのが1976年。ちょっと前近代的な学校だった。

【東海父母懇の特徴②】

二つ目は年表の中で、中高一貫、中高合同、中高人事交流、という言葉がたくさん出てくる。お母さん方の要求で一番強いのは、「中高一貫にしてほしい」だった。同じ敷地内に中学・高校とあっても、実は僕が勤めた時は別の学校のようで、1979年に本館が完成し、中高の職員室が初めて隣り合わせとなったことは先輩の先生方には大事件だったようだ。

その後2006年に新しく今の職員室ができた。職員室の特徴を見ると面白い。1979年当時は、中高で隣り合わせる壁が分厚かった。今の職員室は誰かがバーンとぶつかれば崩れ落ちる可能性もあるくらいに薄い壁で仕切られていて、簡単に打ち破れる状況。誰かやってくれないかな（笑）

父母懇ができる前は、中高一貫にしてほしいという声はまばらで、届きにくい状況だったが、東海父母懇ができあがってからは、地域懇での父母の声が非常に大きくなった。それは兄が高校で二期制、弟は中学で三期制ということもあって、試験の日程や、クラブの活動時期が違うわけで、早く中高一貫にしてほしいという要望があった。この実現には30年ほどかかった。今は年間予定表が配られて、中高で試験日程が統一されている。そこまで来るのは非常に大変だったが、父母の皆さん方の強い要求がこれを実現させたと考えてもらえればいい。

【東海父母懇の特徴③】

三つ目は、私学助成に関して。愛知県全体で私学助成拡充に向けたいろんな活動を真剣にやってきた。私学助成に関しては、放置しておくとやっぱり削減・減額という方向に行ってしまう。いろんな状況の中で、大きな活動・運動を入れてきた。1984年に「それぞれの旅立ち」という映画を愛知県で作った。すごく良い映画で、今もどこかで上映会をやっているみたいだが、主演は東海の高1、相手役は淑徳生。俳優も監督も有名な方だった。なぜ作ったのかというと、いろんな方に知ってもらうため。私学の状況をみんなに知ってもらわないと、私学助成拡充というのは空転してしまう。

【県父母の活動】

それから県父母は、ナゴヤドームで3回祭典を行っている。1997年、2002年、2009年。アリーナとスタ

ンドを埋め尽くし、一日の参加延べ人数は10万人。式典だけで5万人。5万人集めることができなかったら失敗。その時に東海に課せられた目標人数は在校生より多い2800人。そこで関わった先輩父母の方々は本当に真剣で、孫の教育のためと言っておじいちゃんおばあちゃんまで動員して、ナゴヤドームでの祭典を3回成功へと導いてくださった。有名な方をお呼びするので、夜遅くから寝袋を持って並ぶ時もあって、その警備だとかいろいろ大変だった。皆さんが主体者となって動いた。生徒たちもここで自分たちが動かないと成功しないということで、周りのごみ拾いとかを自主的にやっていた。東海生もやっていたが、決して自分の部屋の掃除をするタイプではない。学校の掃除を積極的にやる子でもない。だけど主体者になった時に動きが変わってくる。この「主体者になる」というのが非常に大事で、東海地方の父母懇がここまで発展してきたのは、主体的に動いていただいた先輩父母の方があってこそだと思っている。

岐阜地域懇での講演

【今の助成金制度について】

2020年から年収720万円未満が無償化になった。すごい到達。経常費助成は高校生一人当たり換算が2022年は34万9910円。経常費というのは学校に入ってくるお金で、愛知県の私学に子どもを通わせていれば、生徒一人当たりの年額が支給されている。私学助成は学校全収入の43～44%を占めていて、もしこれがなかったら、とんでもないことになる。

【私学助成の歴史】

初年度納付金を古い時代からたどってみてみたい。大正14年は、私立も公立もほぼ同じで5円50銭。ところが1975年、私立（26万9，200円）と公立（8,500 円）で33倍の格差が出た。その頃の大学授業料が国公立は年間3万6，000円。準義務教育とも言われる高校において、私立高校にかかる費用の多さで、行きたい高校にも行けないくらいの格差がついてしまった。特に1974年から75年にかけて、初年度納付金が40%増になっている。こんなに上がるってことはない。物価にしたってこんなに上がらない。

【高まる格差から運動の高まりへ】

1974年の署名は30万筆で、オータムフェスは行われていなかった。しかし1975年には55万筆、1979年に189万筆まで増えた。1976年に1，000人規模で始めたオータムフェスもだんだん増えて 1979年には7，000人に。このように皆さん方が参加していただく運動が高まっていくにつれて、助成金の額が増えていって、1979年の助成金は全国トップに躍り出るまでになった。皆さん方がやっている署名活動、秋のオータムフェスに参加するという運動が形になっていった。

東地域懇での講演

【助成金を教育に還元】

これを子ども達の教育に還元しようと、学園父母懇が誕生して以来、いろんな形で具体的な教育づくりが進んでいった。地域懇や学年懇などの父母懇行事を通して皆さん方の声が教育づくりに反映していくようになった。父母が相談できる先生が増えて、ざっくばらんに父母の声が届くようになって、それが具体的な形となって現れていった。

【大学進学実績にも影響】

大学進学に関しても、東海父母懇創立以後は東大＋京大の合計合格者数が増えてきている。国公立医学部の合格者数は15年連続全国1位。なぜかというと、父母懇・地域懇等の発展で、子どもを総合的に評価する大切さが結構浸透していったのではないかと。OBや教員が自分の体験談を話したりするのが積極的に行われているし、勉強のみではなく、サタプロとかクラブ活動などいろんなものに参加することで、総合的に子どもが成長していく。そうする中で子どもたちが居場所を見つけて、最終的に進路選択において、自分が行きたい大学はどこなのか？やりたいことは何なのか？自分の頭で考えられるようになってきたのではないかと。そういう意味でも、地域懇談会の果たした役割は大きいと思う。

【ある父母の言葉】

先ほど父母の要求に基づいた形で運動を続けてきたと言ったが、そういうことを体験し、やってこられた父母の方の中で、紹介したい方がいる。中川初枝さんと言って、東海父母懇の代表をやられ、愛知父母懇でも、私学助成を進める会でも会長をされた。その中川さんが昨年お亡くなりになった。「子どもたちにより良い社会を残す」「お母さん、生き生きと輝いていますか?」という言葉を残された。秋のフェスがまだ初期の頃、野外会場の準備のため、中川さんを中心として、大人たちが生き生きと準備をしている姿を見た僕のクラスの生徒が、何か感じるところがあって、それをきっかけにフェスなどに積極的に参加するようになった。「大人の姿に触発される」というのは、時代を超えて普遍的なことだと思う。

【大人の後ろ姿】

子どもは父母や教員の「後ろ姿」を見ながらたくましく育っていくもの。後ろ姿はあくまで後ろ姿であって、「だから〇〇しなさい」につながっては意味がない。お母さんがお母さんの人生を歩む中で、子どもがその時に見る後ろ姿がすごく響くもの。良い後ろ姿を見せると、感謝の気持ち(たとえば自分自身が受験できるのは両親のおかげというような)とクロスしていく。それを、さぁどうだ、とやっては逆効果になってしまう。皆さん方自身が「私はこう考えて、こうやるんだ。だから信じる道をちゃんとやるんだ」という形でやっていれば、子どもは変わっていく。その時に子どもが発する言葉というのは、やっぱり本物の言葉ではないかと思う。親は言葉を発したらあまり良くない。主体的に関わらなければならないのは子ども。

【助けを求める、という発想】

この時代に大事なのは、「困った時は相談する」ということ。迷惑をかけるのはダメなのではなく、迷惑をかけながら人は成長する。迷惑をかけて申し訳ないと思ったら、お返しをすれば良い。そういう発想でやっていかなければ、今の日本社会では過剰に遠慮して、行動に制限がかかって動けなくなっていく。それでは絶対にダメ。皆さん方が後ろ姿を見せる部分の根底に、悩んだら一人で抱え込まずに相談する。困ったら助けを求めることが大事。迷惑をかけて人は成長する、申し訳ないと思ったらどこかでお返しをすればよい、という発想を見せること。

【最後に】

皆さん方が父母懇で色々学んだことをどうやって行動力として前面に出していくのかは、大人側の問題。親として子どもに対してどういう姿を見せるかというのは、皆さん方に考えてほしい。今の日本がこういう社会だから、だから父母懇の存在意義がある。皆さん方にとって、子どもたちでいうクラブ活動のように、父母懇が一つの居場所になってくれればいいのかなと思う。

講演後の寺田先生・折井先生
ありがとうございました!

編集後記

大好評だった報告会と講演会。

折井先生の報告は、言葉がシャワーのように降り注ぎ、速いテンポで進むのに本当に分かりやすくて、素晴らしい発表でした。学校に任せても大丈夫、という安心をいただきました。

寺田先生の講演は壇上に上がらず、授業スタイルで。私たち父母の反応を近くで見ながら話す、その言葉一つ一つに優しさと愛情が詰まっていました。東海父母懇創設から40年という長い年月、多くの地域懇に出向き、父母と生徒を間近で支え、励まし、導いてくださった唯一無二の存在であるMr.父母懇、寺田幸弘先生。その後ろ姿そのものが、たくさんの父母を触発し、勇気づけてくださいました。素晴らしい講演をありがとうございました!